

法律 潜



小説 夜の法律

三九〇円

第一刷発行 昭和四十五年七月十六日

著 者 佐賀 潜

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号一一二
電話大代表東京(九四二)一一一一 振替 東京三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷 製本所 大進堂



© 佐賀 潜 1970

乱丁本・落丁本はお取り替えます。

目次

旅館の女将	5
四十九歳の恋	16
愛と物欲と	27
二号と法律	37
不倫とは何か	48
男の嫉妬	59
妻の座と女	70
ゆらぐころ	81
しのび会い	92
男のわがまま	103
娘と父と	114
女のいがみ合い	125
情事と札束	136

たたかいの前	147
訴訟への道	158
家庭裁判所	168
死をみつめる	179
女の悲しみ	189
入院患者	200
裁判の裏側	210
開腹手術	221
離婚訴訟	231
父帰る	242
虚偽の証言	249
愛の終末	259

装 幀 村山豊夫
カバー画 鈴木正

小説

夜の法律

旅館の女將

東京都渋谷区松濤町——。

そこは、都内でも高級な住宅街で、大邸宅がならび、樹木が多く、閑静な屋敷町である。自動車の交通量も少なく、人通りも稀で、誰でも、渋谷の繁華街と目と鼻の間なのに、全く違った雰囲気を感じ取る。

道路はほの暗く、氣候のいい頃になると、若いアベックが、肩を組み、腕を組んで歩行するのを見かけることが多い。そんな町の一角に、安川瞳の経営する旅館があった。白萩山荘——と名づけられた旅館は、深山の中の一軒家のような感じのたたずまいを示し、利用する人は、東京のまんなかにいながら、北陸の山中にいる思いがする。

檜木ひのきの自然木で出来た門を入ると、青い光を放つ、角灯のともる樹間をすすむのだ。庭木とちがい、自然木を、不整列に植えこみ、いたるところに萩をちらしてある。ま

だ、白い花をつけるには早い、それでも、やわらかな枝葉のむらがる間を歩くと、山道をそぞろ歩きしているような錯覚におそわれる。夜も少しおそくなると、萩の葉が露にぬれ、あいびきのため、ここを訪れる男女の、ズボンや裾をぬらすのだ。

この旅館の女將安川瞳は、夜になると必ず、木立の間をめぐり歩く習慣があった。それは、夫安川正夫の眼をのがれ、一人きりになりたい——との願望の現われのようであった。夫の安川は、毎夜、ここへ帰ってくるわけではない。

一週間のうち、三日間だけ本宅である白萩山荘へ帰り、あと四日間は、青山五丁目にある妾宅で泊る。瞳は、夫の不在の夜は、生々として接客し、女中たちの指図をする。

が、夫が帰宅した夜は、こうして夜の庭へ出ている。眼を合わせるのがいやだったし、うっかりしていると、前夜、妾を抱いた体で、いどまれるからだ。

したがって、夫が酒に酔いつぶれ、寝込んでしまいうのを待って、家へ入る。そして、自室でねむらず、どこか客室で空いているところで、やすむのだ。

こんな状態が、八年もつづいていた。なんとも離婚を考えたが、二人の間に京子という十五歳になる娘がいる。京子の悲嘆を考え、歯を喰い縛って、堪え忍んできたのである。

その辛抱が、崩れかかっている。瞳に、好きな人ができ

たからだ。その人は、家村喜久雄といい、小説家だ。家村が、半年前から、白萩山荘の離れに滞在し、執筆するようになり、夫との不和を打明けるほど親しくなり、片時も離れ難いほどの愛着を感じるようになった。

瞳は、樹間から、家村がいる離れ座敷を眺めた。障子に、長髪の家村の姿が映る。タバコを吹かしている。瞳は喰いるようにその姿を眺め、溜息を吐いた。

家村は、推理小説家としてスタートしたが、この頃では、時代小説も書くし、現代のアウトロウの世界をえがく小説も書いている。

家村喜久雄は、T大の法学部を出て、司法試験に合格し、弁護士となり、丸ビルに事務所を持ち、活動したこともある。

が、数年足らずで、その事務所を後輩にゆずると、作家生活に入った変り種である。したがって、今だに弁護士の登録だけはしてある。が、法廷に出ることは一切やっていない。

彼の書く小説が社会派といわれるほど、経済や政治の仕組み、あるいは、法律の世界が書かれるのは、特異な経歴と経験のためである。三十代の終り頃から小説を書きはじめ、ざっと十年間に、七十冊ほどの単行本を出版し、世間的にも名前を知られている。

瞳は、家村が白萩山荘に泊りこんだ当初から、彼に魅か

れるものを感じていた。黒縁の太い眼鏡をかけた風貌は、決していい男振りではない。が、彼が執筆に疲れているとき、二、三十分間、おしゃべりしているうちに、瞳は、大きな力で引きずられていくようなものを感じた。

「ママさんは、何か、苦悩を秘めているようだね。なぜだか、わかるような気がするよ」

「まあ……なぜでしょう、どうしてわかりますの」

「君の眼、そして体……それが僕に何かをささやきかけるんだよ。眼は口ほどにものを言う——といわれているね。」

しかも君の姿態は女の情感をことさら押し殺し、まるで武装しているようだ」

瞳は、はっと胸にこたえるものを感じた。そういわれれば、たしかに、ここ数年来、女としての生き方をあきらめ、ひたすら旅館の女将になりきろうとしてきた。考えると、長い苦難のみちだったが、それ以外、生きるよりどころがなかったのだ。連れ込み旅館といっても、ここは、高級で、若い二人づれが来るところではない。

財界のお歴々や、政治家がお忍びで、愛人を連れてくる。瞳は、そうした人たちと顔なじみになるが、料亭の女将のように、宴席にはべって、親しく口をきく機会はない。ただ、おなじみとなり、誰はこの部屋と、顔をみただけでわかるようになり、黙っていても、客の氣に入った部屋へ案内させる。

營業成績は、年々上昇し、毎月三百万円の売上げがあり、女の仕事としては、有り余る利益をあげている。

瞳は、銀行借入れが減少するのをたのしみに、商売に精を出していたのである。

「私は、女としての生き方に、見切りをつけておりますから……」

瞳は、口に出してから、悔やんだ。余計なことを言ってしまった——と思ったからだ。

「そりゃいかんね。人間を否定して、なんのよろこびがあるんだね。世間には、夫婦——という名のもとに一つ屋根の下でくらししているが、愛の心がとくに冷えきってしまい、形骸だけで生きている人が多いんだ」

「先生は、弁護士をしていられた頃、民事問題を多く扱ってこれたんですか」

「民事が多かったよ。ことに家庭のトラブルがね。僕が、婦人雑誌に、女の法律——をずい筆風に連載したのが、きっかけになったんだ。一時は、丸ビルのオフィスが、婦人訪問客であふれたこともあったよ」

「それなのに、なぜ、小説家におなりになったんですの」
「好きだからさ。作家になるのは、子供の頃からの夢だったのさ。学生時代、谷崎潤一郎先生の春琴抄を五十回も読んで、大阪の住吉のお寺の場面から、佐助が眼を突いて盲目になるまで、丸暗記したこともあるんだ。雀百まで、踊

り忘れず——というだろう。あれだよ、好きということ、は、理屈じゃない」

家村が、声をたてて笑った。人の善さがにじみ出ている笑い方だった。瞳は「好きということば理屈じゃない」という言葉にこだわった。

「私は、夫の安川がきらいだ。きらいにもいろいろあるけど、心底から好きになれない。結婚がまちがっていた——と悔やんでも、今更、どうなることではない。すでに入籍し、京子という娘まである。十九歳で見合い結婚し、翌年子供を生んだ。その頃から、私たちは、たたかいをはじめた。それから十五年経った。時には、浮気を考えたことがある。が、できることではなかった。私は、実家の家業が旅館業だったので、父に、お金を出してもらい、山荘の経営にのり出したのだけど、それがよかったのか、わるかったのかわからない」

瞳は、しみじみと家村の顔を眺めた。年は四十九歳のはずだが、四十四、五にしかみえない。長髪を無造作にうしろへ撫でつけ、黒いタートルセーターとズボン姿で、机に向っている。書きかけの原稿用紙に、小説の一節が書いてあった。

瞳は、その文字を眼の端に入れた。「瞳」という字が眼に入った。小説の主人公らしい。瞳は、原稿用紙から眼をばなし、家村と視線を合せた。

「この小説のヒロインの名前、君の名前で書いてみたんだ。よく書けそうだよ。なぜなんだろう」

「私が、モデルですか？」

「というわけじゃないが、君の姿、言動を心の中で追いかけているから、ヒロインのイメージづくりをやっているんだ。作家は、空想じゃ小説が書けないよ。現実存在する誰かを、書こうとする。それが君だった。すまんけど、書かしてくれ」

家村がそういって、瞳の手を握った。

瞳の胸がおののいた。

まるで生娘の頃のように、初めて異性の手を知り、息詰る思いをしたときと変りがない。すでに、三十五歳になり、女の盛りを迎えているのに、なんとしたことだろう。家村は、ただ、瞳の手を手のひらに包んでいるような握り方をしている。握力を弱め、瞳の手の感触を味わっているような仕草だ。

「君は、あわれな女だ。だからといって同情してるんじゃない。女の持つあわれさに、ぐいぐい引かれるものを感じるのだ。僕も四十九になる。来年は五十……分別盛りのいい年をして——と思うだろうが、執筆に疲れると君の顔が、眼先にちらついてくる」

家村は、静かに、小説の一節を朗読しているような口調でしゃべりつづける。

「いや、この頃じゃ、書いているときでも、君のことが気になるんだ。不思議な思いだ。自分でもよくわからない。眼尻に小皺をためている悲しげな君の顔が浮んでくる。君の小さな体……おそらく僕の腕の中に、すっぽりとかくれてしまいそうな華奢な姿態……それが、まざまざと浮んでくるんだ」

瞳は、じいんと耳鳴りがしてくるような思いで聞いている。初めて聞く愛の言葉のような気がする。

十九歳のとき、安川と結婚したが、こんなにまで胸のときめく言葉を聞いたことがない。

「瞳さん……マダムというより、そう呼ばしてくれ。僕が、半年もここに居居つてるのはなぜだかわかるかい。精神の安定……いや、ある種のかぶりがあるからかもしれないんだ。作家の我儘といわんでくれ。書く——ということとは、大へんなことだよ。生み出すのは、何か大きな精神的衝動がなければならぬ。僕は、君によって、刺激されているんだ」

瞳は「まあ」と声を飲み、家村の手の硬さとぬくみを感じ取っていた。

「僕は、家にいると一枚も書けない、いや、書きたくないんだ。だから、書くときは、いつもホテルを泊り歩き、孤独になり切って、原稿用紙に向ってきた。が、余りの孤独感、逆に筆が止まってしまうんだ。白萩山荘、ここは気

に入った。ホテルのようにコンクリートで囲われちゃいない。そして、君がいるからだ」

「私も、家村さんがいらっしってから、生きている張合いが出てまいりましたの。自分でもなぜだかよくわかりませんが、お帳場にいたり、くるくるお仕事をしていまして、家村さんが、離れにいられる——と思うだけで、ひどく元氣が出てまいりますの」

瞳は、低い声で、やっとそれだけのことを口にした。語氣は、初々しく、頬を赤く染めていた。

家村が、手をはなした。「好き——ということはどうにもならんもんだ」と、独り言のように口にした。

瞳は、今、樹の間から、離れ座敷を透かして眺めながら、家村の影を、そっと胸に抱いた。少女の頃、学校の教師に抱いた淡い恋ごころに似ている——と思った。

瞳は、なんども、庭先から、その部屋へ入ろう——と思ったが、齒を噛んで思いとどまった。

家村の長髪の顔が、テーブルに俯伏せになったままだ。

へお疲れになったんだわ」と自分にいい聞かせ、離れに近よった。どの部屋も灯が消えている。夜がおそいせいだ。離れ座敷は、孟宗竹の林に囲まれ、テーブルの上のスタンドの灯りが、太い幹を染めている。

軒が広くつき出ている、檜木の丸太でささえてある。軒

燈がぶら下っているが、灯ってはいない。太棧の障子が閉ざされ、大きなかまきりが一匹、ゆっくりと這い上っている。

瞳は、竹林の中に、体を潜め、じっと眼を据えた。ふと、獲物をねらう女豹のような氣がして、息を飲んだ。この思いはなんだろう。ただ家村が恋しいのだ。それだけではない。私は、自分の体を、あの方にぶつきたいのだ。いけないことだ。夫が、妻宅に入り浸っているから、妻は、何をしてもいい——という理屈は出てこない。

けど、じっとしてられない。今夜は、安川が帰宅している。寝てしまったのか、お酒を飲んでいるのかわからない。もし、私が、離れに忍んで行くのを、夫に見られたら弁解のしようがない。家村に迷惑がかかる。著名な作家が、ジャーナリズムに叩かれる。それは避けなければいけない。

が、行きたい。抱いてもらいたい。あの方の腕の中で眠りたい。そして……愛撫されたい。私は、どうかしている。なぜだろう。私の体の中に、こんなみだらな血が流れているのだろうか——。

瞳は、思い悩み、竹の幹につかまりながら、しゃがみこんでしまった。

家村の上部が上り、布団に横になったようだ。スタンドを枕元に移動し、灯を消した。

暗さが、瞳に勇氣を与えた。竹の間を抜け、障子に近寄り、息を静める。中の様子をうかがう。かすかな騒が聞えてくる。その気配が、瞳を引きずっていく。障子に近づくと、ほんの少しずつ開ける。呼吸がはずむ。膝頭がふるえる。中へ体をすべりこませる。閉める。坐りながら、呼吸をととのえる。暗がりに眼が慣れてくる。夜空の星あかりで、わずかに障子から明りが射している。

家村は、仰向けになり、両手を出して、胸の上に組んでいる。

瞳が、ずり膝で近づく。ほんの十センチほどずつ進む。布団のそばまで進む。

暗がりの中で眼をみはる。家村の顔の輪郭が見える。瞳は、上体を少しずつ傾け、その顔に、そっと頬を寄せた。髪の間が頬に感じられる。肌のぬくみが、伝わってくる。瞳は我を忘れ、顔を押しつける。

「やっぱり君だった。夢をみていたと思ったよ。でも……君でよかった」

家村が、低くささやく。

瞳は答えず、家村の唇を塞ぐ。唇づけがつづいた。息苦しいまでの長い唇づけだった。家村が、そっと瞳の肩を抱く。力が加えられ全身がしびれてくる。

「私、好きなんです。先生が……」

家村が、しずかに上体を起し、布団の上に坐った。

「君が、この部屋へ忍んでくるというのは、よくよくのことだと思うよ。僕だって、同じ思いだ。なぜ、君を好きになったのだろう。わからんのだ。愛は、理屈じゃない。降って湧いたように、ある日突然、生れ出づるものらしい」

瞳は、家村のそろえた膝の上に、顔を伏せ、体温を肌で感じ取っていた。家村の言葉がつづく。

「僕はね、本当のことをいうと、今迄にほとんどなく、君を抱きしめたい衝動を感じたことがある。むちゃくちゃにいとおしくなってるね。それを、ぐっとこらえてきた。君が、人妻だからだ。そんなことをいうと、道学者めいて聞えるが、君の夫の存在が、ブレイキになっていたんだ」

「私も、先生の奥様が……」

「当然のことだろう。法律の話をするのはいやだが、二人が結ばれれば、いわゆる不倫な関係——となる。そのことにも、ひっかかるものがあつた」

「じゃあ、私たちは……だめなんでしょうか。いやです。法律なんかきらいです。私は、こんなにまで、男の方を好きになったことはないのです。この気持……いつわりは少しもありません。先生がもし、私を好きになってくださるなら……」

「抱き合い、そして肌を交えるのが本当だといいたいんだね」

「そうなんです」

瞳は、家村の首に手をかけ、わけもなくはげしくゆさぶった。体の中に鬱積するものを吐き出すため、身もだえていたようだった。

家村が堪えがなくなったのか、声をあげ、瞳の小さな体を抱きしめた。

「なぜ、先生と結ばれてはいけないんです？ 私には、夫はいません。安川とは、八年前から断絶しているんです。夫とは名ばかり……それでも私は、女としての生き方をゆるされないのですか」

瞳の声が、かん高くなった。

家村が、

「ここは野中の一軒家じゃない」とたしなめた。

瞳は、その声をうつつに聞きながら、体重のすべてを傾けた。

「君は、安川と別れるのか」

家村の声が、わなないた。

「別れます。力になって……おねがい……一人じゃ決心がつかないのです」

「わかった。どんな力にでもなる。そして、どんな犠牲も甘んじて受ける」

家村が、瞳を抱き倒した。瞳の小さな乳房が、吸引された。帯が解かれ、二人は肌を密着させた。瞳の体の芯が火のように燃え、いのちの泉がほとばしった。気が遠くな

り、そして混沌に落ちこんだ。

どのくらいの時間が経過したのかわからないが、瞳が眼をさましたとき、家村が枕元に坐りタバコを吸っていた。

瞳は、その顔を見上げ、うふふと笑った。夫の安川の眼を盗んで、不貞行為をしたとの思いはなく、生れて初めて、恋をかち得たようなよろこびが、湧き上っていたのだ。

「悔いはいないかい」

「とっても、うれしいの」

「僕もだ。新鮮なよろこびだ。二十代の青春のような感動がある。それを考えていたんだよ」

「よかったわ。先生もそうなら……」

「離れたい気持だ。なぜ、こうなんだ。君がいとおしくてたまらんだ。四十九歳の恋——とは、こんなにまで切ないものかと、自分の心を覗いていたんだ」

「私、歯を喰い縛って生きてきてよかったと、ほんとうに思いますの。先生って、やっぱりすばらしいわ」

「僕は、若くない」

「でもいいのよ。先生が、今、七十のお年寄でも、おんなじだわ」

瞳は、起き上ると、身じまいを直した。体の奥処がまだ燃えている。溜息を吐く。家村の膝の上に、横坐りになり、首にかじりついた。

「君は三十五の女盛りだ。それが、まるで小娘のように、

いとおしいんだ。君の体は、予想したとおり、僕の体の中へ、かくれてしまうほど小さい。僕は、さっきから、好きになったのは、君の姿態が、小さいからか——と考えていた。小さいことは、弱さが感じられる。男は強くたくましい。だから弱い者に引かれるのか——と反省を持った」

「私が先生を好きになったのは、理屈じゃないの。先生のなんでもかんでも好きなんです」

「そうだったな。僕も、君のすべてが好きなんだ。だから、抱き合えたんだ。これから先、二人の愛が、どうなるか……ふと考えたよ。愛の結末とは、なんだろう。夫婦になることだったとしたら、それは不可能だね」

「私、どうなってもいいのよ。先生に抱かれてさえいれば……それでいいのよ」

瞳は、声をうわずらせ、頬をすり寄せた。

瞳は、夜毎、家村の部屋へ忍んでいった。夫が、妾宅泊りの夜は不安はなかったが、十人近い雇人たちの眼が気になった。

白萩山荘は、夜は、十一時を門限とし、入口の門扉を閉めることになっている。女中は、おおむね、十一時半には、やすんでしまう。

瞳は、十一時半がくると、待ちかねたように、家村の離れ座敷へ入る。入口のネジ鍵をしめ、灯りをくらくし、二

人は、息をひそめて抱き合うのだった。そこにおのきがある。ゆるされざる恋だから、危機感が伴う。誰かにみられやしないかの不安がある。

へ私は、いけない女かしら。ふしだらな女なのかしら。世間の目からみたら、不貞の妻というのだろう。でも、あの人をあきらめることはできない。生涯、ただ一度の恋なんだもの。あきらめろ——というなら、死んでしまいたい。死んでもいい。死ぬまで、家村喜久雄を愛しつづけていきたい」

瞳は、自分にいい聞かせ、家村への愛をたしかなものにして行つた。

夫の安川正夫が、瞳の気持の変化に、何かを感じたのか、この頃、帰ってくると、帳場に坐るようになった。瞳は、そこに安川がいるのに、まるで無視したように帳づけをしていた。

背後から、夫が、冷たい眼を注いでいるのがわかる。安川は、やたらにタバコを吹かす。その煙が、瞳にまつわりつく。

瞳は、眉をしかめ、帳面をみつめる。こんなに夫を意識したことはない。なぜだろう。家村とのことが、心にわだかまっているからだ。夫は、感づいているのか、それとも、誰か雇人が、何かをしやべったのだろうか——

「お前は、変わったな」

と、安川はうしろから声をかける。

「どう変わりましたの」

瞳は、背を向けたまま答える。

「おまえ、誰か、好きな人、できたんじゃないのか」

瞳は、向きを変え、夫を睨んだ。

頬骨の張った四角い顔が、薄笑いをうかべている。鼻は低くはないが、眼つきにいやしさがある。色が黒く、肩幅がひろく、みるからに頑丈だ。

「それなんのことです？」

「女が、三十五にもなって、一人でいられるはずがないよ」

「軽蔑しているのね」

「おまえは、なぜ、嫉妬しないんだ。俺が、美千代のことに入り浸っているのに、なぜ、文句をいわないんだ」

「あきらめてるからよ」

「それでも、おまえは生きてるのか」

「京子がいるわ。あの子のために……」

瞳は、唇を噛んだ。家村の面影が、眼底を走った。へちがつてきたわ。安川が敵に見えてきたわ」と、思った。

安川が、うふふっふ——と笑った。夫という権威の座にあぐらをかき、妻を虫けらのように眺めている。

瞳の眼から、火花が散ったようだ。

「女は、二言目には、子供というが、おまえだけじゃな

い。美千代も同じだ。どうやら、女は動物的に子供が好きらしい。が、女の本当の姿は、男を求めているはずだ。おまえは、この頃、眼つきが生き生きとしてきた。誰か、男ができた証拠だ。言え。相手は、誰だか、言ってみろ」
安川は、雇人たちが、眼をみはっているのに、だみ声をはり上げた。

「あなたは、どうなんです？」

「俺は、仕方がないよ。初めっから公然と、美千代とあんなったんだから」

「女というものは、男とちがいます。私は、ただ一生懸命、生きてるだけ……」

「生きるのぞみが、できたってわけだな」

「さあ、どうでしょう？」

安川が、いきなり襲いかかり、瞳の髪を掴むと、引きずり倒した。

瞳は、板の間で後頭部を打ち、人事不省におち入った。

安川が、びっくりして雇人に、医者を呼べ——と怒鳴った。女中が、電話をかけた。

老女中が、走り込み、瞳を抱き起し、「なんてことをするんです。こんないい奥さんがあんながら、お妾狂いさしていて」と、安川をきめつけた。——

安川は、着流しのまま、外へとび出して行った。

医者がきた。「救急車を呼べ」と言った。

誰かが電話をかけた。医者が、何やら注射を打った。救急車がきた。瞳は、眼をつむったままだった。

渋谷の道玄坂上の病院へ運びこまれた。手当をうけ、三十分後に、意識を回復した。引ずり倒されたとき、左脇腹をテーブルの角で打ち、肋骨にひびが入っているとの診断だった。瞳は入院することになった。

翌日、瞳は、付添いの老女中にたのみ、家村へ電話で知らせた。家村が、とんできた。瞳は、女中の前もはばからず、手をのびし、家村の手を掴んだ。女中が気をきかして座はずしてくれた。

「どうした」

「だって、椅子に掛けた。」

「安川に、ゆうべ、引ずり倒されたんです」

瞳は、あらましをしゃべった。涙があふれてきた。口惜しいのか、家村がそこにいるのがうれしいのかわからなかった。寡婦かぶのように、ただ強く生き抜こうと考え、八年間、頑張りつづけてきたのに、家村を知って、瞳は、弱い女になったようだ。

「ひどい、無茶だ。で、僕とのこと、何か感づいての暴力だったのか」

「いいえ、ただ、お前は男がいる——といきなりいい出したんです」

家村の眼が、ぎらぎらと燃え立ってきた。

瞳は、家村の眼を見守りながら、

「安川は、ただ、感じだけで、言っているようでした。お前の眼は前とちがってきた。生き生きとしている。男だ。男ができたんだというんです」と、つけ加えた。

「そうか。鋭い感覚だ」

家村が、じつと瞳をみつめる。

「私、安川と別れます」

瞳は、自分の言葉の反応を待つ。家村は、椅子に腰をおろし、口を結んでいる。何かを考えている眼だ。その眼が、瞳の顔へ近づいてくる。そして、額にキスをする、

「熱があるね」と、問いの答えにならないことを言った。

「ええ、三十七度九分……」

「熱の原因は？」

「それが、よくわかりません」

「安川さんは、病院へきたかい」

「きません」

家村は、口を噛み、腕を組む。瞳は、なぜ、別れろと言ってくれないのかと、考える。

「僕は、別れろ——といたいんだ。が、娘をどうする？京子さんを、片親にしたいのか、それを……」

「京子は、私についてきます」

「娘に聞いたのかい」

「いいえ……でも、あの子……ママと離れるのはいや——」